

一 次の文章を読んで、後の問い(問1～12)に答えよ。(配点 75)

甲

ソフト・パワーを文字どおり「文化的」に読み換えて、文化力あるいは魅惑する力と言いましたが、それをハッキリするには、日常生活上の変化でもさまざまなことをあらためて見直す必要があるように思います。

^A いま都市の再開発が東京をはじめ各地で起こっていますが、人々が都市を楽しんで、また自由に利用することができるような「再開発」になっているでしょうか。都市は住むところであり、働くところでもあります。同時に都市は人間にとって非常に使いやすく、またそこにいることが大きな幸福につながることを約束するようなどころでないという意味がないと、私は常々思っています。誰もそう思っていることでしょうか。しかし、そう思った瞬間、その点で問題となるのは、現在の都市はだいたい個々の人間の生活や行動を重視するよりも、巨大なオフィスビルを建てる、あるいは車中心に道路をつくるという面を重視し、人間が背をこごめて小さく生きていかざるをえないような形の都市づくりが多いという事実です。

私はかねてから「歩ける都市」の創造が必要であると提言してきました。都市に住み、また訪れる人たちが、都市を利用し、楽しむために、都市を歩くことは非常に重要です。歩くことは健康にも重要だと盛んに言われていますが、たとえば実際に東京の街を歩いてみると、とても気軽には歩けないことがわかります。

まず、道路が歩くためにつくられてはいるということに気がつきます。車中心ですから歩道が狭いことに加えて、ある程度歩くと道路によっては歩道が歩道橋で分断され、階段を上ったり下りたりの繰り返しを強制されます。これは大変な苦痛です。それが続くこと散歩の楽しさは味わえなくなります。それに、歩道がよく途切れることも歩く者にとっては苦痛です。

^B 日本の戦後の都市開発はすべて、自動車のための道路、オフィス用の巨大ビルといった考え方がセンコウしたもので、経済発展のための都市づくりでした。たしかに、それは、発展のためには必要なことにちがいがなく、決して否定されるべきことではありません。また、大きく見事な街をつくり出した面はありますが、その反面、いかに人が都市を気持ちよく利用できるかという側面はないがしろにされてきました。

最近の都市開発では、文化都市開発という言い方も現れました。現在、東京・六本木に大きな再開発地区が完成しましたが、その中には巨大なオフィスビルやマンションのほかに、歩ける広場や庭園があり、豪華なホテルやレストラン、ハイ・ファッションの商店も軒を並べて、「文化的」にうまくつくられています。しかし、そこにたくさんの人が集まってきて仕事をしたり、ショッピングを楽しんだりしようとしても、そこへのアクセス、周辺の道路や地下鉄への配慮は何もされていません。

これでは、再開発された区域内はうまく設計されていたとしても、それを都市全体の中に位置づけた場合には、車の渋滞や交通機関の混雑が悪化し、逆に都市の利用度としては大きなマイナス面も生じます。東京では、そういう意味での住民にとっての使い勝手のよさは常に

ア。病院や巨大なマンションをつくる場合にも、道路のことはほとんど考えられていません。人や車が増えるときに、道路を拡張する、あるいは道路を高層にすること

は考えないで建物をつくってしまうために、それを利用しようとしたときに大変な混雑が生じ、迷惑がかかります。

そういう点で、すばらしい建物やレストラン街、ショッピング・アーケードをつくるのはいいのですが、全体として人がいかに使いやすいようにするかが、いまや最大の問題だということです。何よりも都市全体として、人間が快適にしかも効率よく使うのだという観点から都市再開発がどうなされるべきか、事前に充分考慮して計画する必要があります。この当たり前の「常識」がほとんど重視されていない感じが強いのは、どうしたものでしょうか。

そういう点で、現在行われている都心の再開発は、私が見るところ、上海、シンガポール、香港、クアラルンプールなどのアジアの大都市と比べてみても、どうも文化的な配慮、人間的な配慮に欠け、魅力度が劣ります。単に建物やショッピングセンターが豪華ですばらしければほかほかいい、という発想は過去のものであり、そこに住む人間、外部から来た人間が、どう気持ちよく使うかという点の公共サービスやアメニティへの配慮、いわば「歩ける」快適さが優先されるべきでしょう。

乙

「歩ける都市」というと、やはり西ヨーロッパの都市を思い浮かべます。代表的な都市としてパリを考えてみますと、いかに人間がうまく歩けるようにつくられているかがわかります。パリのブルバールといわれる大通り、あるいは狭い入り組んだ路地を歩いても、人間が歩くようにつくられていて、周囲の建物や景色との関係もうまく^{あんばい}按配してあるところが多く、歩いていてほとんど苦になりません。いつの間にかパリの半分ぐらいの場所を歩いて過ごしてしまいます。休日には朝から晩まで歩いていて、ほとんど地下鉄やバスに乗らずに、主要な場所、美術館や劇場、図書館などを歩いてまわることが、いつの間にか習性になっていることに気づかされます。^C東京で同じような生活をするのはちよつと想像できません。

パリのように地下鉄が大変発達していて、どこに行くにも地下鉄ですぐ行けるようなところであつても、都市で暮らすために、歩くことには非常に大きなウエイトがかかけられていると感じます。もちろん、ベンヤミンをひもとくまでもなく、パリの街路には革命や反政府運動の^Dダンアツという歴史が刻まれています。パリケードを築かせないためのブルバール造りという面もあつたわけですが、現在のパリの「歩きやすさ」をここでは実感として、例に挙げました。ロンドンやミラノ、ミュンヘンであつても、同じような部分があります。西ヨーロッパの都市には、北京や上海、東京のような巨大都市は特になく、歩いてまわれるような規模の都市が多くて、非常に人間的なサイズを感じさせます。歩いていれば広場や公園があつて休めるし、カフェも気軽にに入れて気分が落ち着きます。都市全体におけるその配置の仕方も非常にうまく考えられていると思います。

^Dこれがヨーロッパの都市の魅力であつて、そこから、繰り返しパリに行きたくなる、ロンドンに行きたくなるという気持ちが起こってきます。都市の魅力は、第一に歩けることにあるのではないかという実感を抱くのはそのためです。歩けるといふことは、都市の道路や路地、建物、景色といったものを自分の目で確かめる。これが文化というものを直接感じることもつながります。すてきなカフェやレストランやホテルも、

イ

ことになります。

残念ながら、アジアのほとんどの都市は歩かためにつくられてはいません。人間がいかに快適に利用するかという観点からの都市づくりがされているとは思えません。そして、別に日本の悪口を

言いたくはないのですが、日本の場合には美術館、劇場、公園に行く場合でも、気軽に歩いて行けるような距離になかったり、先に言ったように道路がそのようにつくられていない場合がほとんどです。これでは ウ、あるいは都市文化の魅力を非常に低めることになってしまおうでしょう。

一九六〇年代にバンコクに初めて行ったときは、熱帯で暑いことを除けば、決して歩いて嫌な都市ではありませんでした。しかし、いまはイッセツに世界一の交通渋滞があり、それをカンワするような都市計画がほとんど行われてこなかったこともあって、歩くことはむしろ自殺行為になってしまふとさえ言いたくなる場合があります。車で一時間かかるけれども歩けば一〇分で行ける、といった笑うに笑えないようなことも現実があり、しかも一〇分歩けば大気汚染で息はつまり、眼には涙があふれ、呼吸困難に陥りかねません。

バンコクだけではなく、シンガポール、あるいはクアラルンプールその他の東南アジアの都市からインドの都市も含めて、イスタンブールに至るまで、アジアではほとんどの都市が歩けるようにつくられていないということは、自分の足で歩いて確かめた経験として、申し上げることができません。

「歩ける都市」というのは都市の魅力の基本だと思のですが、そのためには、深夜、一人で歩いていても、泥棒やストーカーの危険がないという安全面も重要です。歩けるかどうかという面からの都市の快適度の測定は、犯罪の問題、治安の問題にもつながるのです。歩ける都市かどうかを計ることは、都市のソフト・パワー度、あるいは文化度のバロメーターになるでしょう。

東京は、深夜でも女性が一人歩きできる世界で唯一の都市だと言われたことがあります。最近はおブソウな事件も起きていますが、外国の大都市と較べればまだ、かなりそういう特徴は認めてよいでしょう。一人で歩いても危なくないという点では魅力度は高いのに、歩けるようにつくられていないという面が、東京の魅力を減じてしまっています。

アメリカの都市も、ニューヨークのマンハッタンなどを除けば、基本的に人間が歩くようにはつくられていません。というのは、建物のカンカクや空間の広がりや人間のサイズではなく、車のサイズになっているからです。ボストンやマンハッタンなどの一部の都市の中心部を除くと、車が必要ればほとんど生活できない仕組みになっています。そういう点で、歩ける都市という考え方はないと言ってよいでしょう。

ただ、地方都市などへ行くと、アメリカの小都市は非常にうまくつくってあります。車がないと生活しにくい面は変わりませんが、同時に都市の中心部には歩くためのきれいな街路が設けてあったり、人が気持ちよく休めるような公園があったりして、都市の快適さを味わえる工夫がなされていることに気づきます。

このように都市の魅力度は、いろいろな面で検討される必要があります。単に、ビジネスセンターとなっている立派なビルがある、ショッピングセンターや劇場や盛り場、博物館や美術館がある、レストランやホテルがいい、というだけでは魅力度が高いと言うことはできません。外来者も、そこに住む者も、うまく使いこなせるかどうか、という観点が重要だと思えます。

青木保「多文化世界」(岩波書店 2003年)

(注) アメニティ：環境などの快適さ。特に都市計画で、建物・風景などの快適性を指す。

※ 問題作成にあたり、本文を一部改変した。

問1 傍線部 a ～ g のカタカナを漢字に直せ。解答は、解答用紙の所定欄に読みやすいはつきりした楷書体で書くこと。解答番号は ～ 。

a ハッキ

b センコウ

c ダンアツ

d イッセツ

e カンワ

f ブツソウ

g カンカク

問2

空欄

に入るものとして最も適当なものを、次の①～⑦のうちから

一つ選べ。解答番号は

。

- ① 広く知られたところでは
- ② 新進気鋭とされています
- ③ わがままとされています
- ④ 鬱憤が蓄積されています
- ⑤ なおざりにされています
- ⑥ ねんごろにされています
- ⑦ 社会問題になっています

問3 空欄

イ

一つ選べ。解答番号は

9

に入るものとして最も適当なものを、次の①～⑥のうちから

- ① 文化を創造させるための基礎的な空間として存在する
- ② 都市の中にいる自分を実感させる空間として存在する
- ③ 文化を感じる人間のための憩いの空間として存在する
- ④ 人間が文化を創り世界に誇示する空間として存在する
- ⑤ 文化を人間的なサイズにまとめた空間として存在する
- ⑥ 人間が物欲を抑制し景色を楽しむ空間として存在する

問4 空欄

ウ

一つ選べ。解答番号は

10

に入るものとして最も適当なものを、次の①～⑦のうちから

- ① 都市を整備する仕掛け
- ② 都市開発を促すパワー
- ③ ヨーロッパの観光名所
- ④ 歩ける都市への再開発
- ⑤ 歩ける都市の整備計画
- ⑥ 都市のソフト・パワー
- ⑦ ヨーロッパ諸国の計画

問5

傍線部A「いま都市の再開発が東京をはじめ各地で起こっています」の内容として最も適当

なもの、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は

11

- ① 現在行われている都市の再開発は、そこに住居を構える人々が生活しやすい街並を目的としているということ。
- ② 都市の再開発は戦後一貫して人間の生活や行動を重視するのではなく、巨大なオフィスビルや歩道整備など「文化的」な側面を重視して行われているということ。
- ③ 各地で行われている都市の再開発は、人間の労働環境・住環境などを重視するだけでなく、人間にとっての使いやすさを追求した「文化的」な観点からなされているということ。
- ④ 各地で行われている都市の再開発は、経済発展を目的に行われているために、どこの都市の街並も同じようになっているということ。
- ⑤ 現在行われている都市の再開発では、「文化的」にうまくつくることを重視し、個人の生活や行動についてはたいして配慮していないということ。
- ⑥ 各地で行われている都市開発は、文化都市開発とする言い方もあり、人が集まりやすい環境を整えるようになされているということ。

問6 傍線部B「都市の利用度としては大きなマイナス面も生じます」の説明として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 12。

- ① 最近再開発された特定の区域内では、すばらしい建物やレストラン街などの整備がなされている一方、そこへのアクセスには整備不足から大変な混雑が生じており、人が快適に利用する側面に配慮がされていないということ。
- ② 最近再開発された特定の区域内は、アジアの各都市と比較しても建築的な配慮は十分に成されているものの、人同士の交流が著しく欠けた希薄な社会を形成する結果を招いているということ。
- ③ 最近再開発された特定の区域内は、ショッピングセンターの充実に特に力を入れているものの、そこに至るまでの交通整備が十分に整っていないことから、そこに住む人々だけでなく、周辺都市からの人々がまったく来なくなってしまうということ。
- ④ 最近になって再開発された都市の特定区域内では、建物を高層にすることのみを考慮した結果、地下鉄などの交通整備が遅れてしまい、そこに住む人々やそれ以外の地域から訪れる人たちから、これまでにない大きな不興を買っているということ。
- ⑤ 最近の再開発された都市では交通量増加による道路拡張をまったく考えていないので、周辺地域から流入してくる人々が増加した場合に生じる交通渋滞や、そこに住む人々の生活環境に配慮することができていないということ。
- ⑥ 最近再開発された特定の区域内は、周辺地域から人を集めるための素晴らしい景観を追い求めた結果、人間が快適な生活を行う面をおろそかにするだけでなく、交通アクセス面の発達を過度に遅らせてしまい、都市の活用が十分にできていないということ。

問7 傍線部C「東京で同じような生活をすることはちょっと想像できません」の説明として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 13。

- ① 西ヨーロッパを代表する都市の一つであるパリは、美術館や図書館などを歩いてまわるることができるような街づくりを歴史的にしてきたが、東京では戦前から人が生活・観光するための交通手段を街づくりの中心に据えて行ってきたので、想像しにくいということ。
- ② 西ヨーロッパの都市は人が歩いて生活・観光することができる規模であることに對して、東京に代表されるアジアの都市は、地下鉄やバスを乗り継がないと生活・観光することができない規模であるので、想像しにくいということ。
- ③ 西ヨーロッパを代表するパリの街は建物と景色とが調和しており、また人間が歩くようにもつくりられていることに對して、東京は経済発展が優先された街づくりを行ってきており散歩の楽しさも味わえないので、想像しにくいということ。
- ④ 西ヨーロッパの都市はいずれも人間が歩くことを前提に計画されており、カフェなども気軽に入れるつくりであることに對して、東京では文化的な面のみに注力した結果、商業的な施設は敷居が高いという状況であるので、想像しにくいということ。
- ⑤ 西ヨーロッパの都市は人間的な配慮を優先した都市開発を行った結果、街の景観を重視したつくりになっていることに對して、東京では公共サービスを入れており、人間が生活するための街づくりがなされていないので、想像しにくいということ。
- ⑥ 西ヨーロッパの都市は、人間が主要な場所や美術館などを歩いてまわれるつくりになっていることに對して、東京は伝統的に経済を中心にした都市開発を行ってきた結果、歩いてまわれる場所がオフィスなどに限られているので、想像しにくいということ。

問8 傍線部D「これ」の内容として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 14。

- ① 観光名所である美術館・公園などの配置を各国独自に策定した結果、都市全体を歩きまわることができる人間的なサイズになっているということ。
- ② 上海や香港などと同じように都市が人間的なサイズになるように各国が計画した結果、つくられた美しさがあるということ。
- ③ 都市全体を歩いてまわり、そこで生活する人々が築き上げた文化や憩いの空間を、旅行者が体感できるということ。
- ④ 都市全体における公園やカフェなどの配置がうまく考えられており、都市全体を歩いてまわることができる人間的なサイズを感じさせるということ。
- ⑤ 都市全体を歩いてまわれる規模であるならば、その都市は観光客に再訪を促すことにつながる人間的なサイズになっているということ。
- ⑥ 都市の名所が密集するように都市整備を計画的に進めた結果、都市全体を歩いてまわるることができるということ。

問9 傍線部E「外来者も、そこに住む者も、うまく使いこなせるかどうか、という観点が重要だ」の説明として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 15。

- ① ニューヨークのマンハッタンと同様に日本の小都市も車がないと生活しにくいことに対して、都市の中心部には歩くためのきれいな街路の設置、人が快適に休める公園の設置がされるなど、都市の魅力度を高めるための観点が重要であるということ。
- ② 東京の都市開発について、建物やショッピングセンターが豪華ですばらしければよいという発想ではなく、そこに住む人間や外部から来た人間が公共サービスを快適に使用し、彼らに対してアメニティへの配慮を優先するという観点が重要であるということ。
- ③ ヨーロッパの都市の魅力は、歩いてまわることを通して各都市の道路や路地、建物、景色などから各都市に根付く文化の深層を直接享受できる点にあり、その上でそれらを居住者や訪問者が体感できるようにするといった観点が重要であるということ。
- ④ 東京に代表されるアジアの都市は、美術館・劇場などに行く場合でも混雑した地下鉄を利用するしかないという現状であり、これを改善するためには、人間が快適に利用するという観点を取り入れることが重要であるということ。
- ⑤ 人間が快適かつ効率的に、うまく施設を使うという観点から、東京の都市再開発がどうなされるべきかを考慮したとき、アジアの各都市にある豪華なショッピングセンターなどを模倣する観点が重要であるということ。
- ⑥ 西ヨーロッパの都市に、歩いてまわれる規模の都市が多いというのは、そこに住む人や訪問する人のことを事前に考慮した都市計画を歴史的に行ってきた結果であり、現代でもカフェなどの配置に歴史的な観点を取り入れることが重要になっているということ。

問10 空欄

甲

から一つ選べ。解答番号は

16

に入る小見出しとして最も適当なものを、次の①～⑧のうち

- ① 「都市の魅力」と生活力
- ② 「歩ける都市」の文化力
- ③ 人々を魅了する「都市」
- ④ 「都市の未来」と創造力
- ⑤ 混雑解消の「都市開発」
- ⑥ 「官民一体」の都市開発
- ⑦ 都市再開発と「経済力」
- ⑧ 開発される「文化都市」

問11 空欄

乙

から一つ選べ。解答番号は

17

に入る小見出しとして最も適当なものを、次の①～⑧のうち

- ① 都市の魅力と生活する基準
- ② 歩ける世界の都市を訪ねる
- ③ 歩ける都市の魅力と将来性
- ④ 文化度のソフトパワーとは
- ⑤ 都市の再開発と歴史的都市
- ⑥ 都市の快適性を精密に計る
- ⑦ 都市の魅力を妨げる文化度
- ⑧ 都市の魅力が感じられるか

問12

本文の内容に合致するものを、次の①～⑧のうちから二つ、選べ。ただし、二つとも正解しなければ点を与えない。解答の順序は問わない。解答番号は

18

19

- ① 都市開発の別称として文化都市開発という言い方が広くなされているが、実際には文化施設やショッピングセンターなどへのアクセス、周辺の道路や地下鉄への配慮は何もされておらず、施設利用者や近隣の住民に大きな負担をかけたことがあることが報告されている。
- ② 「歩ける都市」の代表格ともいえるパリは、住民が街中を何の苦もなく歩いて過ごせるつくりになっているために、自分でも気づかないうちにパリの半分ぐらいの場所を歩いて過ごすことができるが、東京もパリを真似た生活ができる都市開発を目指している。
- ③ 東京で行われている都市の再開発は、人々が自由に都市を楽しみ、利用できるようなものではなく、巨大なオフィスビルの建築や車社会に適した道路整備を進めることが重視されたものであり、そこには人が生活することに配慮した道徳観が欠けている。
- ④ 自ら歩いた経験により、バンコクのみならずシンガポールなど東南アジアの都市からインド、イスタンブールに至るまで、アジアのほとんどの都市が歩けるようにつくられていないということが確かめられた。
- ⑤ 日本の戦後の都市開発は自動車のための道路・オフィス用の巨大ビルなど経済発展のための都市づくりでありそれが必要とされていた反面、人が都市を気持ちよく利用できるかという側面については、歩くための道路を考慮していないなど、軽んじられていた。
- ⑥ アメリカの都市はどの道路を見ても空間の広がりや人間のサイズではなく、車のサイズになっており、実際に車がなければほとんど生活できない仕組みになっている点で、「歩ける都市」という考え方をこれまで誰も持つことができなかったことがわかる。
- ⑦ 「歩ける都市」において、犯罪の問題・治安の問題などの安全面も重要視されているのは、都市のソフト・パワー度、あるいは文化度のバロメーターにもなるからであるが、東京はその点を世界に対して発信しないので、都市としての魅力を減じている。
- ⑧ アジアのほとんどの都市は歩くためにつくられてはいないが、香港や上海などは美術館、劇場、公園に行く場合、歩いて行ける距離にあり、都市の発展を見込んだ計画を立てていることによって都市文化の魅力を非常に高めている。

二

次の文章を読んで、後の問い(問1～11)に答えよ。(配点 75)

温帯で砂糖はつくれるか

ヨーロッパ人が、というより、世界の人びとが大量に砂糖を消費するようになったのは、砂糖きびから砂糖をつくる方法を覚えたからでした。砂糖きびの栽培には、かなりの高温と広大な土地、膨大な労働力を必要としましたから、その栽培は、熱帯や亜熱帯に限定されました。ヨーロッパ諸国がカリブ海などに植民地を求めて激しい争いをくり返したのは、砂糖きびの栽培に適した植民地が必要だったからでした。そのようなヨーロッパ人の努力が、結果的には、カリブ海のカリベ族など、アメリカ先住民をほとんど絶滅させ、あまりにも多くのアフリカ人を奴隷の立場におとしいるという悲劇になったのです。

しかし、すべてのヨーロッパの国が、カリブ海に砂糖植民地をもてたわけではありません。たとえば、近代国家の統一が遅れ、植民地獲得競争に遅れをとったドイツやイタリアは、砂糖植民地をもちませんでした。とくにドイツの一部になったプロイセンという国は、アジアやアフリカやアメリカにはあまり植民地をもちませんでした。東方のロシアやポーランドとの国境付近には、早くから植民活動を行なっていましたので、たとえば、そういうところで砂糖をつくることができると考えたのも自然なことです。

^Aこのような希望は、一八世紀末から現実のものとなってきました。すでに、一七四七年には、プロイセンの学者A・S・マルクグラーフが、家畜の飼料としてひろく使われているビート、すなわち砂糖大根の根に、砂糖きびほどではないが、かなりの糖分がふくまれていることを発見していました。フランス革命直前の一七八六年ごろからは、もうひとりのK・F・アツハルトという学者が、ビートの品種改良やビートから砂糖を製造する方法の研究を行ない、一七九九年にその研究を完成しました。

この研究に大喜びしたプロイセンの国王は、彼に広い農地を提供して、本格的にビート糖の製造にあたらせました。ここで生産されたビート糖は、温帯地方で本格的につくられた、最初の砂糖であつたといえます。

ビートの普及

プロイセンと対抗関係にあつたフランスでも、ナポレオンがビート糖につよい関心を示しました。ヨーロッパ全体を支配しようと企てたナポレオンは、イギリスの商品が大陸に流れ込むことや、ロシアなどの穀物がイギリスに輸出されるのを止めようとして、一八〇六年に「大陸フウサ」を命令しました。このために貿易は混乱し、フランスはカリブ海にすぐれた砂糖植民地をもっていたにもかかわらず、一時的に砂糖の輸入がとだえるようなかたちになりました。このことも、ナポレオンがビート糖に関心をもった理由のひとつでしょう。このため、彼はフランス人の学者デレセルに、^(注一)七万エーカーの土地を提供して実験をすすませました。

そのうちに、ヨーロッパの他の諸国やアメリカなども、競ってビートの品種改良や栽培をはじめましたので、一八四〇年には、世界の砂糖生産の五パーセントがビート糖ということになりました。近年では、ビート糖の主要な生産国は、圧倒的に多い旧ソ連圏をはじめ、いわば本家のドイツ、フ

ランスのほか、イタリア、イギリス、アメリカ合衆国などですが、西ヨーロッパ諸国は、ほとんどの国がこれを栽培しています。砂糖が「世界商品」といえるほどに重要で、不可欠な商品であるかぎり、ビート糖の栽培は、どの国の政府にとっても、あらゆる手段をもちいても奨励すべきものした。

イギリスでは、^(注三)今世紀のはじめごろには、こんなこともいわれました。本国内に、一〇〇万人も失業者がいるのだから、「本国内にビート糖の生産を定着させ、住むに家もなく、飢えに泣く人びとに、健全な環境のもとでやれる仕事を与えるべきである」というのです。そうすると、もともと砂糖きびの栽培のためにアフリカからつれてこられた黒人奴隷の子孫たちで、いまま砂糖きびをつくっている人びとはどうなるのでしょうか。本国の失業対策として、ビートの栽培を推奨したイギリス人には、いまや自由人となったカリブ海の黒人の生活など、気にすることもなかったのかもしれません。

明治らしい、日本も北海道でビートの栽培をはじめ、多くはありませんが、いまま生産しています。やはり、第一次世界大戦で砂糖の輸入がとだえたことがあり、国内で自給することを狙ったために、しきりに奨励されたこともありました。ちなみに、日本語では、砂糖きびを指す言葉として「甘蔗（カンシャ）またはカンシヨと読みます」があり、ビート、つまり砂糖大根を指す言葉としては「甜菜」^(注四)というのがありますが、ここでは「砂糖きび」と「ビート」といっておきます。

甲

ビート糖の生産は、一八八〇年代には、ついに砂糖きび糖を抜いてしまうことになりました。しかし、ビートの栽培は、もともと植民地をもたなかったプロイセンが、やむなく近代の植物学や農学の技術をフルに生かし、膨大な研究費と資本をつぎこんで、ようやく生産にこぎつけたものでした。これに対して、カリブ海や南アメリカのプランテーションは、自然条件が砂糖きびの栽培に適しており、そこに奴隷という強制的な労働力をそそぎこんで、いわば労働者には、たいした報酬を払わない方法で生産されていました。

いってみれば、ビート糖と砂糖きび糖との競争は、産業革命以後の近代の科学技術と、それ以前のやり方との競争でもあったのです。後者は、歴史学では、重商主義といわれている方法ですが、自然条件にはさからわない代わりに、多くの人間をギセイにするかたちであったともいえます。この競争のゆくえは、はじめのうちは、各国政府のつよい支援を受けたビート糖の圧勝とみえました。奴隷制度はいくらなんでも、ジンドウに反するということも、ひろく認識されるようになってきましたから、砂糖きび糖にはあまり未来がなさそうにもみえたのです。こうして、砂糖の最大の消費国であったイギリスだけでいえば、一九世紀末には輸入砂糖の七五パーセントはビート糖ということになりました。

イスラム教徒とともに西方への旅をはじめ、キリスト教徒の手で西半球にひろめられた砂糖きび糖は、二〇〇年にわたって「王様」として君臨し、大成功を収めました。いまやキューバとブラジルで、その「世界商品」としての生涯を終えようとしているようにもみえました。

しかし、ことはそうかんたんでもありませんでした。ビート糖は政府の支援がなくなると、経済的にはかなりコストの高いものであることも、わかってきました。反対に、奴隷制度がなくなっても、

カリブ海や南アメリカやハワイの砂糖きび栽培は、インドや中国、インドネシア、日本などからの移民労働者を使うなどの方法で、かなりの程度まで回復しました。それに、オセアニアやインド洋などに新しい砂糖きび栽培地もできましたので、全体としては、砂糖きび糖が盛り返しているのです。けっきょく、最近では、砂糖きび糖が、ほぼ全体の六〇パーセントになっているといわれています。

乙

しかし、砂糖きび糖の敵は、別のところにもありました。それはビートでも、カナダのかえで糖でもなく、地球上の豊かな国における食生活の変化でした。かつて（注四）といっても、私の学生時代のころですから、まだついこのあいだのことですが）、砂糖の消費量は一国の文化程度のバロメーターだ、といわれたものでした。栄養失調の日本人の子どもたちが、アメリカの駐留軍兵士にチョコレートをねだっていたのも、そんなに昔のことでもありません。

ところが、経済的に豊かになり、「ホウシヨクdの時代」となったいまでは、欧米でも、日本でも、ご存じのとおり、砂糖は健康と美容の敵ということにされがちです。スーパーマーケットなどで売られている食品には、それがいかにカロリーがないか、を宣伝しているものばかりが目立ちます。一粒食べると三〇〇メートルも走れることをキャッチフレーズにしていた某社のキャラメルも、いまでは一粒食べるとそれだけ運動しないと太ってしまう、とカイシヤクeされかねない時代になりました。

むろん、いっぽうでは、この瞬間にも何人もの子どもや大人が、地球上のあちこちで、栄養不良や飢えのために死んでいっているのですから、世界のシステムがどこかおかしいことはいうまでもありません。

そうはいっても、アメリカをはじめヨーロッパ諸国や日本のような国では、いわゆる「ダイエツト」に成功することこそが、「意志のしつかりした」「キョウヨウfある」人の証拠とさえいわれる時代でもあるのです。ビート糖どころか、化学的につくられたカロリーの少ない甘味料こそが、まがいなく主役になっていくことでしょう。化学甘味料といえば、戦争の時代をおぼるげにでも知っている大人にとっては、すぐに思い出されるのが「ズルチン」とか「サツカリン」とかいったものです。こうした化学甘味料は、むしろ「砂糖が手に入らないので、やむをえずそれで我慢をした」**I** だったのですが、これからの化学甘味料は、砂糖よりカロリーが少ない利点があるという理由で、用いられるようになっていくことでしょう。

こうしてみると、砂糖の **II** は、もはや終わろうとしているのかもしれない。「世界商品」としての地位も、いささかあやしくなりつつあるといえましょう。時代的にいえば、砂糖のつぎに、つまり産業革命の時代に圧倒的な「世界商品」となった綿織物は、化学繊維の発達ですでにその地位を失ってしまったようにみえます。

世界史を動かした砂糖

しかし、綿織物や原料の綿花にしろ、砂糖にしろ、それらが過去において、まさしく世界史を動かすゲンドウリヨクgとして、燦然さんぜんと光り輝いていた時期があることは、忘れてはなりません。

なぜなら、よくも悪くも、私たち自身の生きている世界が、砂糖や綿織物が動かし、つくりあげてきたものにほかならないからなのです。

砂糖や綿織物のような「世界商品」が、私たちの歴史に与えた影響には、明暗二つの側面がありました。そのなかでも、たとえば、工業の発達というような、いわば、それらが人類にとってプラスに作用した明るい側面はもちろん正当に評価しなければなりません。しかし、それ以上に、それらの争奪戦もたらしたマイナスの効果にも十分に気を配る必要があります。それらは、明るい近代世界をもたらしましたが、いまでも深刻な Ⅲ を地球上の各地に残してもいるからです。

砂糖の残したそうしたつめあとは、カリブ海にも、アフリカにも、ヨーロッパのなかにさえ、いくらかみることができはるはずで。かつて、南北アメリカ史上初の黒人の独立国という華やかな歴史のページを飾ったハイチが、いまや世界でもっとも貧しい、民主主義からもっとも遠い国のひとつとなっていることは、その象徴ともいえましよう。

川北稔「砂糖の世界史」(岩波書店 1996年)

(注一) エーカー…一エーカーは約四〇四七平方メートル。

(注二) 世界商品…一部地域に限らず、世界で広く取引される商品。砂糖や綿織物に限らず、石油や自動車も典型的な例である。

(注三) 今世紀…本書の初版は、一九九六年に刊行された。

(注四) 私の学生時代…著者は、一九四〇年大阪市に生まれ、一九六三年に大学を卒業した。

※ 問題作成にあたり、本文を一部改変した。

問1 傍線部 a～g のカタカナを漢字に直せ。解答は、解答题紙の所定欄に読みやすいはつきりした楷書体で書くこと。解答番号は 20 ～ 26。

- | | | |
|---|---------|--|
| a | フウサ | 20 |
| b | ギセイ | 21 |
| c | ジンドウ | 22 |
| d | ホウシヨク | 23 |
| e | カイシヤク | 24 |
| f | キョウヨウ | 25 |
| g | ゲンドウリヨク | 26 |

問2 空欄 I ～ III に入るものとして最も適当なものを、次の①～⑧のうちからそれぞれ一つ選べ。解答番号は 27 ～ 29。

- | | | |
|--|--|---|
| <p style="text-align: center;">I</p> <p>① 既成品</p> <p>④ 貿易品</p> <p>⑦ 貴重品</p> <p>② 希少品</p> <p>⑤ 代用品</p> <p>⑧ 略奪品</p> <p>③ 必需品</p> <p style="text-align: right;">27</p> | <p style="text-align: center;">II</p> <p>① 積極的概念</p> <p>④ 希望的観測</p> <p>⑦ 創造的進化</p> <p>② 選択的記憶</p> <p>⑤ 権威的性格</p> <p>⑧ 経験的法則</p> <p>③ 歴史的使命</p> <p>⑥ 社会的性格</p> <p style="text-align: right;">28</p> | <p style="text-align: center;">III</p> <p>① 善後策</p> <p>④ 既得権</p> <p>⑦ 後遺症</p> <p>② 集大成</p> <p>⑤ 悪循環</p> <p>⑧ 瀬戸際</p> <p>③ 影響力</p> <p>⑥ 不見識</p> <p style="text-align: right;">29</p> |
|--|--|---|

問3 傍線部A「このような希望」の説明として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 30。

- ① 砂糖きびから砂糖をつくる方法を発明することによって、ヨーロッパに限らず世界の人びとが大量に砂糖を消費することができるようになるという希望。
- ② 砂糖大根の研究と品種改良を行うことによって、東方諸国との国境付近といった温帯地域でも砂糖きびを栽培できるようになるという希望。
- ③ ビートには砂糖きび以上に多くの糖分がふくまれていることが発見されたことから、ビートを砂糖きびに代わる砂糖の原料にできるという希望。
- ④ ドイツやイタリアのように近代国家の統一が遅れた国々においても、激しい争いを繰り返すことによってカリブ海に砂糖植民地をもてるようになるという希望。
- ⑤ ビートに関する研究の進展によって、これまで砂糖きびを栽培できなかった地域でも砂糖を生産できるようになるという希望。
- ⑥ A・S・マルクグラフやK・F・アツハルトのように、国王の力を借りずとも個人の努力のみによってビートの栽培を成功させることができるという希望。

問4 傍線部B「あらゆる手段をもちいても奨励すべきものでした」の理由として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 31。

- ① 砂糖が食生活に不可欠な商品である以上は、砂糖きび栽培に適した地域に植民地をもたないドイツやフランスにとっても砂糖から大きな利益を得る必要があったから。
- ② 砂糖が世界中で取引される重要な商品である以上は、カリブ海に砂糖植民地をもつ国ももたない国も熱帯・亜熱帯地域に限定せずに砂糖を生産できるようにする必要があったから。
- ③ 砂糖が世界の人びとに必要とされる商品である以上は、砂糖生産の地理的条件をゆるめ経済的コスト面でも砂糖きびより優れているビート栽培を促進する必要があったから。
- ④ 世界の人びとが大量に砂糖を消費するようになった以上は、砂糖きびの栽培だけでは十分な砂糖の生産量を確保できず、大量生産により適したビートを栽培する必要があったから。
- ⑤ 世界の人びとが大量に砂糖を消費する以上は、ビートの品種改良や栽培を促進することによってヨーロッパの国はカリブ海以外にもさらに植民地を拡大する必要があったから。
- ⑥ 砂糖が世界中で広く愛される商品である以上は、イタリア、イギリス、アメリカなどカリブ海に砂糖きび植民地をもたない国も砂糖を生産することが不可欠であったから。

問5 傍線部C「カリブ海の黒人の生活など、気にすることもなかった」の説明として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 32。

- ① アフリカでビート糖の生産ができるようになれば、カリブ海で砂糖きびから砂糖を生産している人々は困窮することになってしまうが、失業対策を行い衣食住に苦勞する人々を救うことが先決であるとしてカリブ海の人びとの生活は後回しにしたということ。
- ② 気候に恵まれ砂糖きび糖を生産できるカリブ海の旧砂糖植民地でもビートを栽培できればさらに発展の可能性があったが、カリブ海の黒人たちは現状に満足しビートの品種改良に関心を向けなかったため、イギリスの人びとが彼らを気に掛ける必要などなかったということ。
- ③ 失業対策のためにイギリス本国でビート糖を生産するようになれば、もともと砂糖きび栽培を目的としてアフリカから遠くカリブ海の植民地へ強制的に送られた人びとの子孫が生計を立てられなくなる可能性があったが、イギリスがそれを顧みることはなかったということ。
- ④ カリブ海の人びとはかつては奴隷として強制的に砂糖きび栽培に従事させられていたが、いまや解放され自由の身となって砂糖きび栽培に励んだ結果、砂糖生産においてイギリスとライバル関係になったため、イギリスが彼らに配慮する必要がなかったということ。
- ⑤ 世界中で取引され大きな利益を生み出す砂糖の生産は、どの国の政府にとってもあらゆる手段をもちいて奨励すべきものであり、かつ、フランスとプロイセンが対抗し合うなかでイギリスがカリブ海の人びとの生活まで気を配る余裕がなかったということ。
- ⑥ もともと砂糖きびの栽培のためにアフリカからつれてこられた奴隷の子孫を困窮から救うためには、祖先と同じ砂糖きび栽培にこだわりをもっていてもそのような愛着は後回しにして、ビート栽培への転換を進めることが優先されたということ。

問6 傍線部D「ことはそうかんたんでもありませんでした」の説明として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は

33

。

- ① 二〇〇年という長きにわたって砂糖きび糖が世界の生産量トップの座にあったが、近代の科学技術が発展を遂げ、さらに膨大な資金も投入された結果、最近ではビート糖の生産量が砂糖きび糖の生産量を上回ったということ。
- ② 砂糖きび糖は、イスラム教徒により西ヨーロッパ諸国へ伝わったのちキリスト教徒の手で西半球全体にひろめられ、さらに近代科学技術の発展がその生産を後押しするかに見えたが、キューバやブラジルでは生産に失敗してしまったということ。
- ③ プロイセンは膨大な研究費と資本をつぎこみビートの品種改良やビートから砂糖を製造する方法を研究したことによりようやく砂糖の生産にこぎつけたにもかかわらず、自然条件に恵まれた砂糖きび植民地を新たに獲得すると研究を止めてしまったということ。
- ④ 近代の科学技術の発展と、人権を尊重しようとする意識の高まりによる安価な労働力確保の困難によってビート糖の生産量が砂糖きび糖を上回ったが、奴隷によって担われてきた労働が移民に置き換わったことにより結局は砂糖きび糖が衰退しなかったということ。
- ⑤ プロイセンをはじめとした国々での研究成果によってビート糖は砂糖きび糖の生産量を抜くことに一度は成功したものの人間は自然条件にさからうことができず、結局はカリブ海に限定して砂糖きび糖を生産した方が経済的コストがかからないことに気づいたということ。
- ⑥ 日本語では砂糖きび糖を甘蔗やビートと呼び、本来はビートと呼ばれるべき植物を砂糖大根や甜菜と呼ぶように、砂糖の原料の種類は国によって異なるにもかかわらず、砂糖きびとビートを単純に二つの種類に分けて議論しても無意味であったということ。

問7 傍線部E「世界のシステムがどこかおかしい」といえる理由として最も適当なものを、次の

①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は

34

- ① 人びとは砂糖きび糖とビート糖との競争に取り組んできたにもかかわらず、突如カナダのかえで糖が登場し、さらには地球上の豊かな国における食生活の変化までもが「世界商品」である砂糖の存在をおびやかすようになったから。
- ② 日本でもついこのあいだまで栄養失調の子どもたちが砂糖を多くふくむ甘いお菓子をねだっていたにもかかわらず、経済的に豊かになると打って変わって砂糖が健康と美容の敵であるというように判断基準が様変わりしてしまったから。
- ③ どれほどの量の砂糖を消費するかということはあくまでも物理的な問題であり、かつ、一国のなかにおいても個人差の大きいものであるにもかかわらず、多い少ないを国ごとと比較してある国の文化の程度が測れると世界的には考えられているから。
- ④ 食事の量を制限したり低カロリーの食事をとったりするという身体に関わる問題と、意志がしっかりとしているか否か、幅広い知識に基づく心の豊かさがあるかないかという精神的な問題を短絡的に結び付けて論じているから。
- ⑤ 砂糖は豊かさの象徴としてその消費量が一国の文化程度を測る尺度であると考えられた時代があったにもかかわらず、いつの間にか貧しさの象徴となり、化学甘味料こそがもてはやされるようになったから。
- ⑥ 砂糖がもつカロリーが健康や美容の点から敵視されやすい国もあれば、摂取できるカロリーの不足から栄養不良や飢えにより死亡する人がいる国もあるように、カロリーのもつ意味が異なってしまうほどまでに国によって栄養状態の格差が生じているから。

問8 傍線部F「砂糖や綿織物が動かし、つくりあげてきた」ということの説明として最も適当な

ものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は

35

- ① 経済的に豊かになるまで、欧米でも日本でも人びとは砂糖から多くのカロリーを摂取して生命を維持し、そのおかげで産業革命も成し遂げたように、「世界商品」を消費することによって私たち自身の生きている世界が成立していた時代があったということ。
- ② 砂糖が、その生産のための研究を通じて近代の科学技術を発展させた一方、植民地化された地域や奴隷にされた人びとには負の影響を与えたように、「世界商品」はたとえその重要性が変化した後でさえも世界のあり方にまで影響力を残しているということ。
- ③ 砂糖が多くの人によって必要とされたために国家単位でビート糖の生産技術が開発されたり、これを手に入れて世界を支配しようとするナポレオンのような人物が登場したりしたように、「世界商品」には世界のシステムを変えてしまうほどの力があるということ。
- ④ もともと生産できる土地が限られていた砂糖が、西ヨーロッパ、カリブ海、南北アメリカ、アジアなどの生産できない場所へは貿易品として流通したように、「世界商品」は世界中で取引されることによって競争は厳しくとも豊かなグローバル社会を形成したということ。
- ⑤ 砂糖がイスラム教徒の手によって西へ西へとヨーロッパへ伝わり、さらにはカリブ海の砂糖植民地に定着したことが、イスラム教徒とキリスト教徒の支配地域の拡大を表すように、「世界商品」が流通する姿は二度とかえらぬ過去そのものであるということ。
- ⑥ 砂糖の生産のために、早くはプロイセン、フランス、そしてその他のヨーロッパ諸国やアメリカで植物学・農学研究が進歩したことは近代の科学技術の発達というよい面を持つ一方、現在にも続く深刻な自然環境の破壊を生み出したということ。

問9 空欄

甲

から一つ選べ。解答番号は 36 に入る小見出しとして最も適当なものを、次の①～⑧のうち

- ① 砂糖きび糖とビート糖の共演
- ② 産業革命と科学技術の栄光
- ③ イスラム教徒とキリスト教徒の攻防
- ④ 近代植物学と農学技術の発展
- ⑤ 近代科学技術と奴隷労働の競争
- ⑥ 産業革命と重商主義の進化
- ⑦ ビート糖生産と政府支援の成果
- ⑧ 奴隷と移民労働者の争奪

問10 空欄

乙

から一つ選べ。解答番号は 37 に入る小見出しとして最も適当なものを、次の①～⑧のうち

- ① 砂糖の黎明^{れいめい}
- ② 未来の世界システム
- ③ 砂糖が動かす歴史
- ④ たそがれの砂糖
- ⑤ 砂糖と産業革命
- ⑥ 「世界商品」の夕なぎ
- ⑦ 砂糖きび糖の挑戦
- ⑧ 万能の化学甘味料

問11

本文の内容に合致するものを、次の①～⑨のうちから二つ、選べ。ただし、二つとも正解しなければ点を与えない。解答の順序は問わない。解答番号は

38

39

- ① 自分たちには砂糖きびより栽培しやすいビートの存在にいちはやく気づいたプロイセンがビートの品種改良やビートから砂糖を製造する方法の研究を支援し続けた結果、世界全体として一時はビート糖の生産量が砂糖きび糖を抜いたが、最近では砂糖きび糖がもち直している。
- ② 砂糖は世界で愛されて広く取引される商品であったため、取引の主導権を握ることができれば大きな利益を上げることができたが、その莫大な利益の一部が植民地に還元されたことによって、フランス領のカリブ海植民地では最初の黒人独立国家であるハイチが誕生した。
- ③ 第一次世界大戦によってヨーロッパにおける砂糖貿易がとだえたことも後押しとなって、明治らしい日本では国内での自給と販路拡大を狙ったビート栽培が続けられてきたが、近年の「ダイエット」ブームの影響を受けて砂糖自体の生産量が減少している。
- ④ プロイセンやイタリアは近代国家の統一が遅れて西ヨーロッパ諸国間における植民地拡大競争で遅れをとったため、「世界商品」である砂糖の大量生産に成功することで優位性を確保することを狙い、イギリスの砂糖輸出を妨げる外交政策をとった。
- ⑤ イギリスは、砂糖きびの栽培に適したカリブ海に広大な植民地をもつていちはやく豊富な砂糖の生産に成功した反面、国内に一〇〇万人もの失業者を抱えたため、イギリス国内では自由に暮らすカリブ海の人びとに対する不満が沸きあがった。
- ⑥ ビート糖と砂糖きび糖の競争と、産業革命以後の近代科学技術とそれ以前のやり方との競争を比較するとき、後者を歴史学では重商主義と呼び、自然条件にさからわない代わりに、多くの人間の労働力を安価に搾取することを意味した。
- ⑦ 砂糖の原材料をめぐる争いがそのカロリーの是非をめぐる争いに置き換わって砂糖の世界的な重要性が低下したかに見えたが、砂糖生産にもなつてつくられた植民地や奴隷が示すように、「世界商品」は商品自体の重要性が低下した後でさえも社会に影響を残している。
- ⑧ ビートに次いで多くの糖分をふくむ砂糖きびの存在は砂糖を「世界商品」の地位に押し上げたが、その栽培には労働力確保の点から制約が大きかったため、植民地や奴隷制度を世界ではじめて生みだし、現代にも通じる国際社会の課題を残すことになった。
- ⑨ ハイチが、「世界商品」である砂糖を生産し植民地として繁栄したにもかかわらず、砂糖の衰退と軌を一にして、世界でもっとも貧しく民主主義からもっとも遠い国のひとつになつてしまっていることは、砂糖の「世界商品」としての衰退を表している。